
小説家になろう

モリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説家になろう

【著者名】

モリヤ

【あらすじ】

小説を書こうと思った俺の実体験レポートのよしなもの

(前書き)

まず最初に「めんなさい

タイトルとか……いろんな意味で「めんなさい

なんか、問題あつたら報告して下せよ申し訳ない

物心ついた頃から　　書くことが好きだった。

中学時代通つていた英語塾に、何故かタイピングゲームがインストールされた2台のパソコンが用意されていて、まさんと2人してランキングを競いあつていた。

おかげでブラインドタッチだけは随分と上達し、ある日父親が俺専用のパソコンを買ってくれたから、道具はもう揃つていた。

小説家になろう

いつからか、そんな夢を抱くようになつた。

「なんかいいネタ思ついたか?」まさんが言つ。

まさんは、幼稚園の頃からの幼馴染で、大親友だ。

アニメとゲームをこよなく愛する　いわゆる『オタク系』なまさんは、リアルの女性に興味がないふうだった。

「俺は2次元の世界で生きたい」まさんの口癖だつた。

(……いや、それは無理だろ)

一見、現実逃避しているように見えるが、実は非常に物事を論

理的に考えるリアリストでもあり、俺よりもずっと頭が良かつた。

「だいたいよ、小説家なんてそんな簡単になれるもんなのか？
その前に、何か一つの事をずっと続けてきた事がお前にはあるのか
あ？」

「……いや、まあ確かにね、仕事……ぐらいか

俺は生まれてこの方、何か一つの物事をしつかりキッチンとやり遂げた！ という経験がない。

ビジュアルバンドに憧れてギターを習い始めたが、アルペジオの練習中に小指が痛いという理由で挫折した。

テレビアニメとしても放映されていたスラムダンクに憧れ、バスケ部に入部をするも、汗をかくのが嫌だからという理由だけで、部活を怠けるようになつた。

喧嘩の強い男になりたいと意気込んで空手部に入部すれば、先輩と組み手の最中に腹を殴られ、あまりの痛さに泣きべそをかいて退部した。

「英語を喋れる男は女の子にモテる」と、誰かが言っていたのを真に受けて英語塾に通つていたが、すぐに飽きてままさんとタイピングゲームばかりしていた。

大学のサークルというものに憧れて、大学へ行こうと決意するもの、勉強が嫌いだという理由で入学を諦めた。

社会人になつてからも、スーパーの店員、コンビニの店員、整肉

工場、警備員、……いろいろやつては見たものの、ビックの職場でも何故か上司と喧嘩になつて、怒鳴り散らしてクビになる。

そんなこんなで気がついたら、特に何も出来ない今まで30年近くも生きてしまった。

「……ビーしょ」いつたこびつしたらここと言ひつかうのか……。

「知るかよ！ つてかタクシーが続いたのが奇跡だよな」 ままさんが言つ。

3年前、仕事が楽そだからという理由でタクシー会社に入社した。

2種免許の取得費用など多少の問題はあつたが、実際働き始めたこの業界はやはり楽で（と言つたら失礼だが……）、おかげさまでもう3年も続けている。

「でもタクシーつてもうかんのか？」「いや、全然もうからん」

俺は今、タクシードライバーとして働いている。

確かに、この仕事は楽な面が多い。 仕事中は基本、営業車を運転し1人でいる事が多いため、上司や同僚から監視される事もなく、人の目を気にする必要もないし、労働時間帯も大まかな決まりがあるだけだから、比較的好きな時間から仕事を始めて、帰りたい時間に家に帰る事も出来る。

休憩だって、仕事中眠くなれば適当な場所に営業車を停めて1、2時間昼寝をしたって、会社から怒られる事がない。

家に戻つて休みたいなら、いつだって戻る事も出来るし、サボるつと思えばじっくりでサボれる。

ただ、そんな自由度の高さと引き換えに、この業界の市況は非常に悪い。

数年前きせいかんわとある総理大臣きせいかんわが規制緩和きせいかんわなんてもんを提案してくれたおかげで、市内はどこへ行つてもタクシーだらけ……客の奪い合いが日常茶飯事となつてゐる。

「お、こりゃ、今割り込んだらが!」「……は? なんすか?」

こつものよつて営業車を運転中、別の会社のドライバーがイチャモンをつけたへる……なんて事もたまにある。

俺はただ流し営業をしてゐる最中に、乗り場付近で手を挙げてゐるお客がいたからその場に停まつただけなのに、客待ちをしていたドライバーに文句を言われてしまつた。

「え? ここ駄目なの? ……仕方ないなあ」

俺の車に乗つた客が、申し訳なさそうに俺の車を降り、イチャモンをつけてきたドライバーの車に乘ろうとする。

「いや、いりすよ、……」そのまま出しますから

俺は密にそう言つて静止をせると、運転席のドアから文句を放つドライバーの顔を無視して、営業車を発進させた。

「だいじょぶー？……あの人怒ってたよ？」「……ああ、たまにいますから」

ちょっとした事で喧嘩になり客を奪い合つたりするのも、ドライバーの多さに反比例するように客が少ないのでから、仕方ない。

だが、いちいち相手もしていられない　　いつしている間にも、時は刻一刻と経過してゆくからだ。

限られた時間の中で、とにかくいかに効率よく客を拾つかを重視して、流す。夜になれば適当な場所で客待ちをして、客を拾つ。

それをできるだけ多く繰り返さなければ、とてもこの業界では生きていけない。

それは、業界人なら誰もが知っている事だから……。

「今日どう？　稼げてる？」「いやー、全然」

仕事を終え会社へ戻ると、早々に同僚に声をかけられた。

「金曜日なのに全然人いなかつたねー、いやーまいった」「ホントっすね」

いつもやって職場の同僚や、ドライバー達と会話をすることはよくあるが、誰と話しても、「客拾えねえ」だの「人いねえ」だの、「散々待つて乗つた客、1メーターだったし」だの、業界の不況話ばかりが話題に上がる。

(……はあ、転職すつかなあー)

「そのままタクシー業界で食つてこいつと思つても、景気は一向に回復の色は見せず、市況は悪くなる一方だ。

「の業界は、別の会社で定年を向かえ余生の小遣い稼ぎで働く年金暮らしの老人や、年齢の関係上どこへ行つても雇つてももらえないよつな年配者がほとんどだ。

俺のようこ、まだ30にもなつてないうちから業界に入る人間はごく稀で、実際社内でも俺は一番若かった。

「あんちやんまだ若いんだから、今のつまでもっとマシな職場探しはほうがいいんじゃないのー？」

個タク（個人タクシー）のドライバーに、そんな事をほのめかされた事もある。

（……マジで転職すつかなあ）

とは言つても、生まれてこの方向をやつても長続きしなかつた俺にとつては、珍しく3年も続いたタクシー業界から退くと言つ事には抵抗もあつた。

前日の朝から働き始め、既に日付が変わつて4時間も経過した頃、やつとの思いで帰路に着く。

家に帰ればもうクタクタで、何かをする気力もないまま横になるそんな毎日。

突然、携帯の着信音が室内に鳴り響く　肉さんからメールが届いている。

『今夜、あの喫茶店で集まりませんか？』

「了解っす」とメールを返した。

数時間後　長い長い眠りから目覚めた俺は、となり町にある喫茶店へマツダのデミオを走らせる。

ブーン！ブウウウウ――――――ン！　と軽快な音をたて、デミオが快調に走り出す　最高だ。

つい最近、貧乏にも関わらず長年乗り続けた愛車から、乗り換えたばかりの新車であるデミオ。

マツダはいい、なんといつてもこの加速　風になつた気分だ。

夜道をひた走り、喫茶店へと到着すると、既に全員集まっている。

俺は意気揚々とデミオを乗り捨て、店内へとホップステップジャンピング！　オンザトライコートーク！！

……「めぐ、ふだけすぎた。

……なんだこれ、すげえさみいな。

……まあ、仲間と集まるのは大好きだ、いいストレス発散になる。

「おつす！」「お疲れ様です」

いち早くまさんか、続いてエロシが俺に声をかける。

「えーと、……どこに座ればいいのかな?」「あ、ココにです
よ」

俺よりも10歳近く年上の肉さんが、丁寧に敬語を使いながら真ん中の席を避け、そこに俺を座らせる。

エロシは、まさんと同じく幼稚園からの幼馴染で、1学年下の後輩だ。

普段は外壁工事の仕事をしており、適度に肉の盛り上がりたいわ
ゆる 細マツチヨ野郎だ。

アクティブそうな外見とは裏腹にとんでもない人見知りで、初めて会った人間とは1対1では会話をする事すら出来ないが、一度仲が良くなつた女の子とはセフレ状態に陥ることもしばしばあるような、ムツツリ野郎もある。

「……どう、もやしの栄養素って結構奥深いよな」「ああ、金な
いとき重宝するんすよねー」

俺がやつてきたにも関わらず、それも気にせず会話に戻るままた
んとエロシ。

この2人はいつでもマイペースだ。

他のメンバーの事も気にせず2人の世界に入る「ラブラブぶりとい
つたらもう……ホモかと! お前らデキてるのかと聞いてみたくも
なる。」

(……てか、もやしの話つて)

もやしをテーマにここまで語り合える人間は、世界でもこの2人だけだわ。

2人のラブ・ラブぶりに呆氣を取られながら視線を移すと、「……」正面に座る天皇陛下みたいな顔の男と目があった。

「クツ……」天皇陛下みたいな男に睨み返す俺。

「……」「……」陛下も同じように俺の目をじっと見つめ、不可解なにらめっこが続く。

無言のまま、表情を変化をせしていく俺。

なんとしても、このにらめっこに勝利しなくてはと、必死に形相を変え続ける。

ちょっと目を細めてみたり、口を尖らせて『ひょっと』の真似をしてみたり……ハタからみたら、相当異様な光景だわ。

(……へ、変態だ)自分でそう思しながらも、陛下から目を背ける事など、俺には出来ない。

「……ブツ！ くははははっ！」数十秒して、とうとう陛下が限界を迎える笑い出す。

「いい顔が出来るよくなつたね

よく分からぬが、陛下に褒められた俺は感激のあまり立ち上がり、陛下の頭上に右手を差し出す。

「ありがとーーー。」

何故か大声で感激をあらわにし、陛下と握手……ではなく、陛下の頭を齧づかみする。

「いやいや、ホントにありがとーーー。」 いつたい何をやつてこるのか。

この天皇陛下みたいな男は、仲間内ではマーボと呼ばれているおそらく、仲間内では一番の変態だ。

変態を極限まで極めたような変態といつたり、こいつの事だと、変態同盟の会長がメダルを渡しにやってくるほどだ。

その、変態イズザオブイズマーぼは、確かに変態ではあるが、この俺の命の恩人でもある。

天皇フェイスに変態な上、面倒くさがりで気の小さい性格で、ながら、非常に仕事熱心でもあり、人一倍人情味のある変態なのだ。

3年前、俺がまだこの街に慣れていなかつた頃、俺を自身のアパートに居候させ、仕事を怠けてばかりの俺のために給料の1部を恵んでくれたり、食事を奢ってくれたり、時には職場まで送迎してくれたり、至れり勿くせりの働きぶりを見せてくれた 偉大なる変態だ。

とにかく、いつも仲間内で集まつてはワイワイ騒いで語

ついでに そんなひと時が非常に楽しい。

「小説のほう、進んでますか?」肉さんが、いきなり話を振つてくる。

「まあ、……まあまあ」曖昧な返事 進んでますよーなんて、言えるワケがない。

「お前、ホントに小説家なるつと迷つてんのか?」「いや、それはマジですかよー」

ままさんと突っ込まれ、とりあえず言ひ返してみる。

小説家になりたいところ夢は、嘘じゃない。

ただ、小説を書いひとつも思つもの、何も書けない。

「実際さー、今の職場つてさー、全然稼げないし……だからって転職したって、今までの経験から言つてどうせすぐ辞めちゃうしだしやあ……」

「まあ、……タクシーはなあ、……でもだからって簡単に小説家!
なんて無理だらうが!」

「いや、わかつてんだぜそれは……」

でも、書くべらりしか思いつかない といつとも、書きたいんだと思つ。

昔から、書くことだけは好きだった。

勉強が大嫌いだった俺は、学校の授業も口クに聞かず、いつも昼寝ばかりしていたが、脳内では当たり前のように色々な妄想が浮かんでいた。

色々な物語を、頭の中で繰り広げていた　はずだった。
にもかかわらず、実際書こうとする、何を書いていいのか分からぬのも事実だった。

勉強は嫌いだったのに、小学校の道徳の授業だけは、熱心に取り組んでいた。

200文字詰めの原稿用紙に、授業や読書の感想文を書いたりとか、そういう事が大好きだった。

でも、小説だと書けない。

「なーんで書けねえんだろ? なあ」 さつぱりさつぱりだ。

「そもそも、小説読んだりしてるんすか?」 後輩のエロシにまで突つ込まれる始末。

考えてみれば、書く以前に読んだ事すらない。

語り合つて家に戻り、パソコンのモニター前に腰掛ける。

「よっしゃ!」 とにかくまずは小説とやらを読んでみよつと、ウエブブラウザを起動する。

「し・ょ・う・せ・つ……つと」『小説』と漢字に変換してキー ボードのエンターキーを押すと、グーグルの検索結果の一番上に、『小説家になろう』というサイト名が表示された。

よしよしとクリックし、サイトを閲覧する。

適當な小説に目をつけて、とりあえず開いて読み始めてみるが……

「……フムフム、……なるほど、……うん、飽きた」10分で飽きてしまった。

だいたい、絵も映像も音声も付いていない　ただの活字だけの文章を延々読む作業というのは、俺にとっては苦痛だった。

こんな言い方をしたら失礼かもしねりないが、小説家志望にも関わらず、文字を読むのは苦手なのだ。

本末転倒とはこの事か？

本当に俺は小説家になれるのだろうか？

いーいっくら覚えて、小説のシンの序も圧ついなー。

「あれえ？ ビーチやつて書いたらこいんだろ？ へー。」

簡単なプロローグとかヒローグとか、設定的なものなら、いくらでも思いつくなに、こぞそれを使って作品を作りつとすると手がある。

「まーーずいなあ……」激マズだ。

数日間、そんな感じで悩み続ける日々が続いた。

あまりにも幾ら考えても思いつかないので、仕事のない日は一日中家にこもって、モニターと睨めっこをしてしまひ程度だった。

「……あーー！」

その時、ふと思い出した事があった。

中学時代、地域の同年代の生徒の作文を集めた文集というものがあった。

どんな事をテーマにしても良いし、文字数も制限はないから、何か作文を書いてくれと、校内の生徒が全員で作文を書くハメになり

「そ、うだ、作文だ！」

俺は、そんな事をいきなり言われても、何を書いたらいいのかなんて、まるで思いつかなかつた。

テーマが絞られていないので、頭の中で整理がつけられなかつたからだ。

散々悩んだ挙句、思いついた作文のテーマ それが、これだ！－

「僕は、作文が嫌いです」

そう、これだ。

あれを真似て書けばいいのでは？

それからは、まるで地面から水が湧き出るがの如く次々と言葉が浮かび、スラスラと指が動いた。

キーボードを叩く手に力が入る そう、今俺は小説を書いているのだ。

そして出来上がった小説 そう、それがこれだ！

今あなたが見ているこれだ！！！！

……はい、どうもすいませんでした。

……やっぱり、俺は小説家には、向いていないかも知れない。

マジですいませんでした、ごめんなさい。

このサイトで読んで下さった方、なによりサイトに投稿されている小説家の方々に、非常に申し分けない事をしたと、深く反省しています。

でも、書いてしまつたら、誰かに読んでもらいたくて……。

「みんなさい、もつべし眞面目にみんなの作品を読んだ後で、必ずや出直して参ります。。。」

完

(後書き)

どーしても投稿してみたくて仕方がなかつたんです

やつてみたかつたんです

色々な方々に失礼を、ごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5757m/>

小説家になろう

2010年10月10日00時46分発行